

JADEC ニュース NO. 68 2006.3.20

【もくじ】

特集 グループ学習を考える

グループの力 実践からつかんできたこと……………2

学習者が語るグループ学習……………4

探究行動の社会的形態としてのグループ活動…4

脳行動学講座8

「グループ学習の脳行動学的意味」……………5

活動報告&とびく……………7

随想 「荻生徂徠の勉強法から学ぶこと」……………8

巻頭言

「ニート」からの問いかけ

能力開発工学センター 理事 小澤 秀子

最近、ニート(NEET)という言葉をよく聞く。Not in Education, Employment or Trainingの頭文字で、「職に就いていず、学校機関にも所属していず、就労に向けた具体的な動きをしていない若者」と定義され、2004年の『経済労働白書』は就労対象人口である15歳 - 34歳のうち52万人(*)がニート状態であると報告している。(*2005年の内閣府『若者無業者に関する調査』中間報告では85万人)

国は素早く対応策を打ち出した。厚生労働省は「若者人間力強化プロジェクト」で「若者自立塾」の新設を中心として231億円の予算を組み、また、厚労省、文科省、経産省らが参画する「若者自立・挑戦戦略会議」は若者の就業支援として810億円の予算(いずれも来年度)を組むなどの力を入れている。将来の税収減による社会不安や社会治安の悪化などに対する危機感からかと思う。

ニートとはどういう若者が。一般に「働く意欲のない怠け者」というイメージが強く、親の甘やかしがニートを生んでいると極論する向きもある。しかし、NPO法人「育て上げ」ネットを立ち上げ、若者の社会参加と経済的自立を支援する活動を行っている工藤啓氏は、ニートは決して怠け者ではない、職に就きたいと思いつつも動き出すことができないのだと言う。(工藤啓著「ニート支援マニュアル」より)

動き出せない原因はいろいろあるが、対人関係に自信がない、特に年齢の上の人との会話ができないという場合が多いという。職に就いた時に周囲の人々の何気ない会話に入れず孤立した、その思い出が恐怖になっているというケースもある。知らない人と話をすると緊張で言葉が出ないという若者も多く、そうした若者はほとんどが学校時代に先生に相談したことが一度もないという。対話が出来ないことへの不安が動き出せない原因の一つになっているということだ。

若者に限らず、日本人は対話能力が低い。ヨーロッパやアメリカ、その多くの都市でそうであるように、目が合うと微笑みかけ、外国人と見ると興味津々の表情で話しかけ、新しいつきあいを楽しむというような雰囲気は日本にはない。「向こうから歩いてきた東洋人が、笑っていれば中国人、怒っていれば韓国人、下を向いていれば日本人」アメリカではこんな風に言うそうだ。英語がしゃべれないからというより、異質な人との対話を避けたいという気持ちの表れであろう。

対話の不得手な若者は、こうした日本社会、またそれを生み出している教育の犠牲者ではないかと思えてならない。私の身近にも、職を転々と変えている若者が何人かいる。彼等はフリーターとして分類されているが、職が長続きしない原因の多くは職場での人間関係がうまくできないということにあり、ニートたちと同じ悩みで苦しんでいる。

生きる力としての「対話能力」その育て方はこれでよいのか。ニート問題は、ニートたちからの社会への、そして教育のあり方への問いかけではないか。教育に関わる者は、これに応えなければならない。

発行者：(財)能力開発工学センター(Japan Ability Development Engineering Center)

グループの力

- 実践からつかんできたこと -

能力開発工学センター理事 小澤 秀子

自主的な行動の場としてのグループ

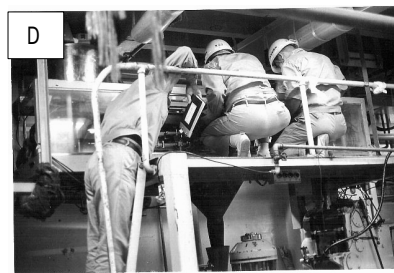
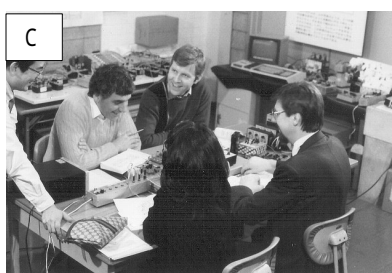
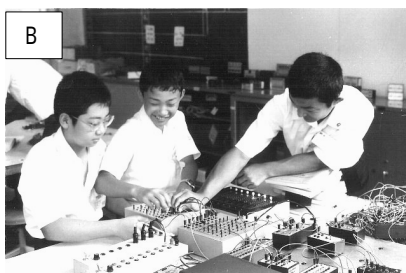
私たちは、学習は基本的にグループによる共同によって行うのがよいと考えている。人間はもともと社会的な存在であって、仲間と共同することで知的にも技術的にも、さらには感情的にも育つものであり、そうした社会的な行動を行う場としてグループの意味は大変大きいと考えている。そのため私たちが提案する学習では、常に3人から5人ぐらいの小グループの学習形態をとっている。

Aは、「学習システム設計能力養成講座」(10日間)の研修風景。主に企業の教育担当者を対象にした研修(定員12名)で、さまざまな業種の企業から技術教育を担当する人、営業・事務系の教育を担当する人など、年齢も性別も多様な人々が参加。



BとCは大規模な構案シミュレータを使う「コンピュータの学習」。Bは中学生たち、Cはスウェーデンの電気メーカーの教育担当者たち。Dは、ある製糖工場で製造工程を全自動に切り替える時に全員対象に実施した現場マンの再教育研修の一コマ、小型のテキストを持って3人で砂糖の小袋詰め工程のシステムを解析しているところである。

学習のグループは必ずしも固定的なものではなく、全員で映像資料を活用してのディスカッション、或いは2人ずつのグループ作業と言った場面もあった。しかし、いずれの場合も3~4人のグループによる活動が、学習の効果を大きく上げてきた。



自主的な学習姿勢が育ち、学習の質が高くなる

グループ学習では、教育の場が「教える人 学ぶ人」という構図から、学習者が共同して自らの課題に向き合うという自主的な行動の場へと変わっていく。グループで共同思考することによって、一人では気づかないことも他のメンバーの違った角度からの指摘で広がったり深くなったりする。学習者の活動が見えるということも、学習の質を高めることにつながる。多人数同時の学習では学習者の反応が見えない。何がわかって何がわからないのか、どんな発想が生まれているのか。グループ学習であれば、話し合いや共同作業の過程で学習者が考えていること、やろうとしていること、問題にしていることが見え、個々の学習者・グループに対して適切なアドバイスや課題を提示することができるのである。

学習意欲・エネルギーを生み出す

写真からも分かるように、グループ学習は、楽しく学習できる。われわれは学習は楽しくなければならぬと考えている。単に面白おかしいということではない。課題に挑戦し探究し学習することの面白さ楽しさということである。失敗することもある、なかなかアイデアが出なくて苦しいこともある。それを一緒に苦労しながら解決する。解決したときには人数分だけ楽しい、解決しなくてもまた、その苦労をともしたことが楽しかったと学習者たちは言う。そういうことが学習する意欲・エネルギーを生み出していくのだと考える。そうした学習経験を積み重ねることによって、ミスを指摘されても素直に受け入れられるフランクな人間関係が出来上がっていく。

「40～50代の現場マンに本格的な制御システムの学習など無理」「職場の人間関係(上下関係や縄張り意識)もあり難しい」「1年間も勉強できない」と達成を疑問視されたDの場合も、ほぼ1年後には、研修を受けた者たちが、従来は技術者しか見る事のなかった工場システムの設計図面を片手に工場を走り回るようになり、「皆の心が開かれ互いの意思疎通が格段によくなった」「工場の雰囲気が変わった」との報告を受けた。グループ学習が目標達成に貢献すると同時に、新しい人間関係を育てたのである。

今、各方面でコミュニケーション能力育成のニーズが言われているが、その観点からもグループ学習は大きな意味を持つと考えている。

グループ学習を成功させる条件

グループで学習することのマイナス面が皆無というわけではない。進度の遅い学習者が足を引っ張る、一人のリーダー的学習者が他を省みないで進んでしまう等々。しかしこれらは二つの方法で解消できる。

「グループ行動のしかた」を指導する

多くの場合、グループ行動は初めからは上手には出来ないし、人によっては、グループで行動することに強い拒否反応を示す場合もある。したがって、学習の初期においては、指導者はグループ行動を成り立たせることに集中する必要がある。グループの中の一人がインストラクターに質問したとする。そうした場合、その質問に直接答えるのではなく、質問をグループ全体の問題とするようにリードする。同時に他のメンバーに仲間全体で行動するよう働きかける。自分のペースで学びたい、と別行動をしがちな学習者もいる。そういう学習者には、グループで学ぶことの意味について突っ込んだ話し合いをすることも必要である。

学習教材・学習のプログラムの準備

もう一つは、学習の場の準備である。グループの一人一人が主体的に活動を展開するための、具体的な課題と行動の対象となる教材、そして段階的に学習を積み上げていくためのプログラムが必要である。私たちは多くの場合、学習のテーマ・段階に応じて、単純なものから複雑なものへと工夫したシミュレータ教材、学習する人の意欲的な行動を誘うような映像教材などを準備しておく。

グループ行動がスムーズにできるようになれば、後はほうっておいても学習者たちがそうした教材群を活用して、またその範囲を越えて学習を進めていくようになる。教師は、学習者のよきアドバイザーとなって、その学習を楽しみながら援助することになるのである。

能力開発工学センターのグループ学習

このところ協調学習(Collaborative Learning)という言葉が耳にする。講義式の一斉授業やeラーニングなどの個別学習を補うグループ形態の学習をさしているのだが、単にグループという形態だけを問題にしているのではなく、学習者相互の主体的な学び合いをイメージしている。これは知識を単に伝達するものとしてではなく、社会的な相互作用の結果として形成されるものとしてとらえる認知心理学に基づいた新しい学習方法として注目されており、今、その具体的展開の方法が模索されている。能力開発工学センターの学習システムは、既に1970年代からこの考え方で作りあげられてきている。

榊 正昭

能力開発工学センター客員研究員

(101) 学習者が語るグループ学習

学習後の感想文より

(学習を)続けられたのはグループの力。一人の学習では、壁に突き当たったとき、挫折してしまう。

グループは年齢差があったほうがいい。若い人に刺激されていい。

グループは各職場の混成がよい。互いに知らないことを教え合ったり教えられたり、グループ意識が高まる。

(以上、現場マン再教育)

この学習は、学校の授業と違って自分たちで進めていくため興味がわいてきます。

コンピュータの言葉の意味や、コントロールのしかたなどもよくわかりましたが、他にコンピュータとも関係のないことも1つ学びました。それはグループ活動の良さです。グループ行動をすると友達がたくさんできて楽しく(学習)できるということと、1人がわからなければ他のわかっている人に教えてもらえるからです。

グループの人たちと一緒に同じ回路を一生懸命つくるのが面白かったです。

友情の輪が広がり、いろいろな学校の友達ができた。知らぬ間にいろいろな人と協力し、一緒に悩み、考えたりもした。それに年齢差も(気にし)なくなっていたので、気軽に話もできた。

(以上、コンピュータ学習:中学生)

グループは一つの社会であり、その構成員が、それぞれの英知を集め、意見を出し合い協力して次の課題に取り組む、(自分が経験してみても)そのよさにやっと気づいた。

(コンピュータ学習:中学校教師)

モーター、電流計、スピーカの3グループに分かれて、中を調べたり、協力しながらものづくりができたのでわからなかったこともわかったし、とても楽しい勉強でした。少ない人数で教え合ったのでよくわかった。

何より協力し合ってきたということがとても良かったと思います。楽しく学習できて、とても勉強になりました。

(以上、電気の学習:小学校6年)

理論的なことも勉強できたが、グループになってお互いに質問しあったりしながら勉強するという学習方法を体験し、これから実際に仕事するときにも応用できると思うので、とてもよかったと思う。

(看護基礎技術:看護大学学生)

探究行動の社会的形態としての
グループ活動

学習は本来、社会的な行動なのである。個が全体になり、全体が個となる人間存在の循環運動としてあるものなのである。(略)

人間は環境と交流する行動の中から、社会的動物としての感覚を身につけてくるのであって、与えられた知識によって行動するのではない。逆に行動の中から自己の知見を定着させるのである。知識以前に生活する行動があるのである。個々別々の個人というものを抽象的に考えて、それを知識の容器と考え、それに対して知識を注入するという文脈で考えられた教育システムは、人間の存在を根底から破壊しつつある。(略)

個別化方式はわずかに個人のペースによる行動と言う心理的な特色をもっているが、それは仲間の中でこそ意味があるのであって、それ自身では意味がない。(略)

このような考察からわれわれは探究行動の場をグループによる探究と言う方式をとった。それはこの形を唯一の形と考えるという考え方ではない。個別性も尊重すると同時に全体としての社会の探究へ参加するという姿勢を大切にしようとしたからである。個は全体の中へある時は入り込み、ある時は全体から離れ、そういう運動をしつつ、全体と個とが調和して進んでいかななくてはならぬ。そういう社会的場における探究行動でなくては、探究ではないのではないかと考えたのである。

探究行動を育てる行動の姿勢(1975)より
(矢口新選集3「探究行動を育てる学習システム」)

矢口 新:前能力開発工学センター所長
(1913 - 1990)

グループ学習の脳行動学的意味

研究開発部 矢口みどり

脳の学習の原則は「行動をしたことを学習する」、行動したときに起きた「脳の神経細胞間の刺激の連絡関係の状態」が残ったものが記憶である。その記憶が蓄積され、関連づけられ、組み合わせられていくことによって、人間は様々なことが理解できるようになるし、新しい行動を生み出していくことができる。そうした脳の学習のしかたと働き方に対して、グループ学習はどのような意味をもっているのだろうか。

1. 脳の働き方が多様である

他への働きかけが多いほど、脳は活性化し
複雑な働き方をするほど、脳は発達する

多人数の一斉学習では、多くの場合20%程度(30~40人クラスなら6~8人)の反応で授業が進められていく。残りの学習者が主体的に活動せず、教師の話をただ聞いているだけでも授業は進んでいき、その場合の学習者の脳の働き方は非常に単調しかも少ない。

一方、グループ学習は生徒相互間の共同関係を意図した学習であるから、1つの課題に生徒たち自身が共同して取り組むという形がとられる。調査や実験をして、その結果をまとめ、表現する、といった多様で複雑な学習活動になり、グループが少人数であるほど各自が行う行動の種類と機会とが多くなる。

2. 共同する 分類し総合する力, 人間関係力

一つの課題を共同して行うには、分担, 総合, 協力といった活動が必要になる。分担し総合する過程では、全体をとらえる行動、要素に分ける行動、それらの関係を整理する行動などが行われる。これらはものごとを構造的に見るという行動であるが、これにより、脳はものごとを構造的にとらえることを経験する。

具体的に行動実施するためには、コミュニケーションが欠かせない。それは言葉だけのコミュニケーションではなく、自分や相手の行動とともにあり、行動を成立させるためのコミュニケーション行動である。

どのように共同するか、分担するか、それぞれが調べたことをどうまとめるか、自分の考えを相手にわかりやすく伝える、相手の話を聞き(聞き出し)考えていることを読み取る。意見が異なる場合はそれを調整することも必要になる。また、互いに仲間の発言や行動を観察し、意図するところを読み取り、協力の仕方やそのタイミングを計らなければならない。

そうした行動の中で学習者は、試行錯誤しながら全体の中での個のありかた、個の総合としての全体のあり方を経験していくことになる。そして、経験したことを、脳は学習する。

多人数での学習の場合でもこうした行動がないわけではないが、数人が発言してあとは多数決で決めたり、誰かが代表で実験や発表をし残りはそれを観察するというような形になったりして、学習者それぞれの行動の量と質はグループ学習に遠く及ばない。

3. 教え合うことで、理解が深まる

記憶の再構成, 問題意識に位置づいた学習活動

グループ学習における「教え合う」という行動が、内容の理解を深めるということが、今注目されている。

「教える」ということは、相手の疑問に応じて、自分のとらえていることを理解させることである。そのためには、相手はどう考えているのか、何がわからないのかをつかまなくてはならない。その上で自分がとらえていることや理解の土台になることを整理し、相手が理解できるやさしい言葉と論理で説明しなくてはならない。相手の状況によって事例を示したり教材を使ったりして説明しなくてはならない。(より本質的な理解と具体的なとらえ方が必要であり、しばしば自分もよくわかっていないということが判明する場にもなる。)

説明を受ける側は、教えてもらった内容と自分がとらえた内容と比較し、抜けている部分違っている部分を修正していく。

この過程で、教える側教えられる側双方の脳の記憶は何度も繰り返し引き出され、関係付けられ、再構成される。それだけ脳の神経回路が働くということである。脳の神経回路は働くほどその働きがアップする。反応しやすくなる。

また、この「教え合う」という行動が、教師からの一方的に与えられたものでなく、自分たちの疑問、問題意識にあわせて行われるということが、脳が働きやすい条件にもなっている。自分たちが行動した結果(実

験結果や、調べたこと)や、目の前の具体的な事実や教材を材料として行われるため、記憶情報がネットワーク化(関連づけ)されやすいのである。忘れにくい、確かな記憶になるということである。

4. グループが脳を活性化する

難しい課題に挑戦できないのはほとんどの場合、失敗に対する恐れのためである。しかし、1人ではできないそうもない気が重くなるようなことも、3人4人と仲間がいれば何とかなるかもと第1歩が踏み出せる。

がんばればやれそうだと感じたとき、脳は最も活性化される。グループそのものに脳を活性化させる条件が備わっていると言ってもよいかもしれない。

グループで取り組む場合、失敗しても仲間が痛みを分け合うことができる。もう1回やってみようと思し合う。なかなかアイデアが出なくて苦しいとき、1人がへこたれても、別の誰かが頑張る。その頑張りを見て自分もやるぞという気になる。チャレンジするエネルギーが出てくる。

この学習過程がよい、と学習者たちは言う。苦労しても、教えられるのではなく、自分たちの力で掴み取っていくというところに充実感があり、だんだん面白くなっていく。チャレンジすることの面白さ、楽しさをつかめば、脳はそのことを避けることはなくなる。脳は、本質的に自分にとって好ましい方向に働こうとする。それは生存のための本能だからである。

チャレンジすることで、チャレンジ精神は育っていく。グループでの課題挑戦は、個々のチャレンジ精神をも高めることになっていく。

5. 経験の共有

「グループ学習は楽しい」と学習者は言う。集まってわいわいやるから楽しいという意味ではない。苦労しても、つらい学習であっても、いや、だからこそ楽しいというのである。

グループ学習では、学習者たちが同じ経験を共有することになる。その同じ経験を土台に考えることになるので、互いの意図するところが理解しやすい。

また、単なる経験だけではなく、それに伴う感情を共有する。感情は行動したときに起こる脳の働きの1つである。同じような経験をしていないと、言葉でいくら説明しても本当には理解できない。

学習活動を進めていくための苦労や、失敗による

挫折感、そして成功の喜び。失敗を克服することができれば、失敗せずにできたときより嬉しい。そのときの苦労や喜びを分かり合える、語り合える仲間がいるということが大きな喜びとなる。

6. 主体的活動が主体的姿勢を育てる

グループ学習の一斉学習との最も大きな違いは、学習活動を学習者が主体的に進めるということである。主体的な行動を積み重ねることによって、主体的な行動姿勢が育っていく。活動がうまくいった場合とそうでない場合とは違いがあるが、それでも一斉学習に比較すれば格段の差である。

一斉学習ではその展開の条件から、教師が主導することが多く受動的な学習活動が多くなる。受動的な行動を続けられれば、脳は受動的な行動のしかたを学び続けることになる。小学校から大学まで講義中心の一斉学習方式で育てられてきた日本人が、主体的な行動力が不足している理由はここにある。

グループ学習の効果は大変大きい。学習内容を理解するという面は言うまでもなく、社会の中で行動していくための力(主体的行動力、コミュニケーション力、人間関係力、チャレンジ精神 etc.)を磨くという意味からはまさに不可欠な学習活動の仕方といえよう。

7. グループ学習のしかたの学習

しかし、グループ学習は最初からなかなかうまくできない。グループにしさえすればグループ活動が成立するわけではないのである。なかなかうまくできないから講義式でやる、その方が早く進む、という指導者がいるが、それは間違いである。進んでいるのは指導者であって学習者ではない。学習者をいかに行動させ、行動のしかたをその脳の中に成立させていくかが、学習の目標にならなければならない。

グループ活動がうまくできないからこそ、グループ学習をさせなくてはならない。グループ活動は、グループ学習の中でその行動のしかたを練習し修正していくことによってしか、できるようにならない。そこに指導者の力が発揮されなくてはならない。

編集後記 トリノオリンピックでカーリングが注目された。前半1勝3敗で出遅れたチーム青森が、その後、強豪カナダ、イギリスと開催国イタリアに勝ち7位入賞を果たしたのは、まさしくチーム力、グループ力に他ならない。(M)

活動報告 看護教育研究チーム

教育現場の課題にどう応えるか

教育現場の課題解決の方向を探る話し合い

(05/12/11 於:久留米大学)



この春、ここ数年のテーマであった行動主義に基づく看護基礎技術学習のカリキュラムと教材の設計が終了する。看護教育における現場の課題に具体的に伝えていく、その準備が整ってきた。

そこで、看護教育研究チームでは、能力開発工学センターの学習の考え方に関心を寄せている看護教育現場の方々に呼びかけ、共同して課題解決していくための方向を探る話し合いを持った。

参加者は、久留米大学看護学科の河合千恵子名誉教授、森本紀巳子助教授、聖マリア短期大学看護学

科入部久子学科長ら5大学12名。当センター看護教育研究チームからは小澤、矢口(み)の2名が出席。

話し合いでは、次に挙げるような問題点や課題が語られ、今後それぞれの事情に合わせて研究を進めていくための工夫をしていくことを約した。

(語られた問題点や課題)

従来の学習や、カリキュラムに対する疑問や問題

・基礎で学んだことが役に立たなかったと学生に言われたことが、ショックだった。

・応用が利かない。手順教育ではだめだと感じた。

・基礎、成人、老年、小児の学習の連携が取れていない。同じことを何回もやったりしている。

・行動させられない(安全の為)内容の学習の仕方。

学生の行動姿勢についての悩み

・すぐ答えを求める学生。考えない学生たち。

(聞く姿勢、教わる姿勢が育ってしまっている。)

学習のさせ方とその積み上げ方

・行動分析のしかた、教材の作り方

・行動を通じてどう悟らせるか

・何をどこまで考えさせたらよいのか

・「基礎」を土台にしてその先へどう積み上げるか

とびっく

「ジュニア科学賞・とやま」受賞

探究クラブの菅野君(中学3年生)

富山県の明瀬正則氏より嬉しい便りが届きました。

能力開発工学センターの探究学習の考え方を伝えたいという教員OBの方々(ADE北陸支部)で運営している探究クラブ(注1)、小学校3年生のときからその探究クラブのメンバーである菅野君が、2005年度の「ジュニア科学賞・とやま」(注2)を受賞したのです。

注1:富山市東部児童文化センターにて月2回開催。活動内容については、能力開発ニュース 59,61をご参照下さい。

注2:富山市出身の田中耕一さんのノーベル化学賞受賞を記念して2003年に創設された賞で、自然科学について研究や実験・観察に取り組んでいる富山県内の小中学生のうち、「優れた着想」「ユニークなアイデア」「粘り強い努力」のどれかに抜きん出た児童生徒(3名以内)を表彰するもの。

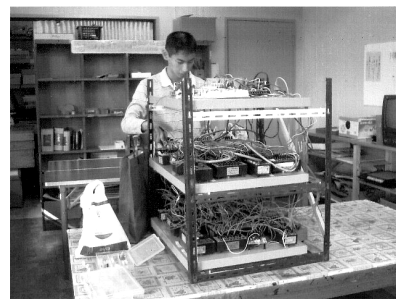
菅野君の研究テーマは

「コンピュータによる制御システムを独自に開発する」
受賞理由は、

小学校時代から電気現象やコンピュータに関心を持ち続け、発電機の電力を制御するという目的を実現するため、電気回路を解析してアナログ信号をデジタル信号に変換する変換器を独自に作り上げるなど、一貫した研究姿勢に工夫と集中力と強い気迫がうかがえる。

おめでとう!
菅野君

探究クラブで
研究する
菅野君



荻生徂徠の勉強法から学ぶこと

能力開発工学センター評議員 奥田 健二

日本人の平均寿命が延びてきたために、定年退職後から死亡するまでに、20 年以上の時間的余裕を持つという例が多くなってきた。この余裕時間を有効に活用するために、大学とか大学院に入学して勉強をやり直す人の例も少なくない。しかし安直に大学に入り直したりすることには、筆者は疑問を感じている。特に社会科学系統の分野においては、外国の学界での理論に無批判に依頼している学者が少なくないからである。

現在、勉強をやり直そうと計画している人たちの最大のストロングポイントは、豊かな職務経験を持っているということである。それ故に、この職務経験を生かした勉強を自分自身で進めることが、最も適切な勉強方法であることを認識すべきだと考える。

このような勉強方法を生かして成果を上げた先達者として荻生徂徠(1666-1728)が著名である。徂徠は 14 才の時、医師であった父親の江戸払いによって上総の国に移住し、26 才の時に江戸に帰るまで、そこで一人で勉強を続けたのである。彼は 2, 3 冊の漢籍を江戸から携えただけだった。彼は自分の住む村々をよく歩き、農民の生活の実態にふれ、その体験を通じて考えたことを漢籍を読み直して再考し、さらに再び農村に出て農夫の実態の姿にふれて、自らの考案した内容の正否を確かめ、また深めるという方法を繰り返したのであった。この方法によって自己研鑽に徹した徂徠は、26 才で江戸に帰ったとき、洞察力の優れた一流の学者として、広く世間から迎え入れられたのである。

彼の研究方法は、例えば論語を読む場合にも、第三者の解説などに頼るのではなく、直接原典にあたって、自分の頭で考えるという方法に他ならない。この方法に基づいて、彼は朱子学に頼ることをせず、直接孔子の言葉と対峙したのである。そして論語のほかにも、漢書とか史記などの古文を読むことを重視したのであり、古文辞学と呼ばれる学問の方法を樹立することとなるのである。

さて、朱子学の基本は“自然”という概念であった。天道は自然に形成されたものであり、人間が勝手に変えることはできない。従って天道を反映した人道も人間が勝手に変えることは許されないと強調したのであった。そして社会の階級区分などは本来固定的なものであり、変えようとしてはならないと教えたのである。徳川幕府が朱子学を尊重した狙いが理解できるのである。

しかし徂徠は、この朱子学の“自然”という概念を否定する。古代から伝承される人道なるものも、堯や舜のような偉大な人物によって創唱されたものであり、すなわち人道といっても人間の“作為”によるものであった。堯や舜がいかに偉大だといっても、人間として無謬ではありえない、我々日本の人間と変わらない。我々も堯や舜のしたように、自らの経験を見つめ直し、自らの社会の問題を捉え、自主的な学理を作り出さねばならないと、徂徠は強く訴えたのである。

第二の人生を充実させるための自己研鑽の方法については、これまで自らの体験を積み重ねてきた成果を活かすという方法を尊重すべきではないかと筆者は考えている。

発行者 財団法人能力開発工学センター (Japan Ability Development Engineering Center)
〒203-0042 東京都東久留米市八幡町 1-1-12 / TEL:0424-73-1261 / FAX:0424-73-1226

E-mail: info@jadec.or.jp ホームページ: <http://www.jadec.or.jp/>

[本誌は J A D E C セミナー卒業生の会「ほんものの教育を考える会 (ADE研究会)」の支援により発行しています]